

## 言葉の多様性から考える大学英語教育 ——社会言語学からの実践的アプローチ——

脇本 恭子

### はじめに

高いコミュニケーション能力の育成が目指される昨今、大学教育においては、アクティブ・ラーニング、教師とのインタラクティブな授業など、学生による主体的・能動的な学習が推し進められている。それに伴い、学生は積極的にグループ・ディスカッションに参加し、英語によるプレゼンテーション技術も、一時代昔に比べると向上したと言える。他方、成果が現れるのに時間のかかる文学作品の精読学習は、特に即戦力を有する人材が求められる中において、年々厳しい状況に追い込まれている。実際、学校教育の現場においては「最近では検定教科書にも文学作品が出てくるのが殆どなく(あるいは授業で扱えることが殆どなく)残念」と、現状を憂慮する教員の声を聞く。大学教育においても高校までの教育と同じく、文学教材が減少の一途にあり、脇本(2021)でも触れた様に、学生の活字離れ・文学離れが進んでいる。

そこで問題となるのは、課題レポートを作成する際、さらには卒業研究で英文原書の分析が必要な場合、何の観点からどのように取り組めばよいのか、英語専門の学生すらも皆目見当が付かないことである。こうした現状に鑑み、脇本(2021)では、一つの試みとして *Oliver Twist* (1839) の一節を言語の分析から精読し、英語教育へと繋げる方法を検討した。この論考では語彙数 230 語程度に過ぎない短い一節を、学生が深く掘り下げて考える内容を多面的に提示したが、本稿においては、ジャンルの異なる広範囲な資料を「社会言語学」の観点から分析する方法を模索する。学生が「言葉の多様性」に意識を向け、レベルに応じて段階的に考察するための具体例を示し、引いては文学作品を読み解く実践力を育成することを目指す。

### 1. Step I : 導入

#### 1.1 社会言語学の視点

いきなり文豪の作品の英文読解をするには抵抗がある学生でも、海外ドラマや映画に出てくる俗語や隠語、あるいは非文法的な表現には興味を持つ者が意外に多い。通常の学校教育では習うことのない「口語表現」に新鮮さを感じ、もっと知りたいと学習意欲をそられるものと思われる。この学習意欲を高めるのに、本稿では社会言語学 (sociolinguistics) の視点を踏まえ、学生が話し言葉の特徴をどのように考察していけばよいのか、実践的な方法を検討する。

社会言語学は文字通り言語を社会的要因との関係から研究する学問領域であるが、「音声学・音韻論」や「文法(統語論・形態論)」といった基本分野から、広くは「談話分析」「文化人類学」のような諸分野に跨がる学際的 (interdisciplinary) な領域である。そのため、社会言語学を交えたテキスト分析をする際は、前段階として「音声」「文法」の基礎知識を身

に付けておく必要がある。よって、大学の英語教育では、高年次を対象とすることが望ましい。

## 1.2 気付きと着眼点

それでは、まず学生が「言葉の多様性」に意識を向ける第一歩として、Katherine Mansfield の “A Cup of Tea” (1922) からの引用を例として挙げてみる：

(1) A: ‘I can’t go on no longer like this. I can’t bear it. I can’t bear it. I shall do away with myself. I can’t bear no more.’

B: ‘You shan’t have to. I’ll look after you. Don’t cry any more. . . .’ (p. 350)<sup>2)</sup>

この対話の中で多くの学生に聞き慣れない語が “shan’t” で、意味のわかりにくい成句が “do away with (oneself)” である。それらについては辞書を引いて、前者が “shall not” の縮約形、後者が “get rid of” や “kill oneself” (「自殺する」) であることをまず確認させる。アメリカ英語 (以降 AmE) では殆ど使用されない “shall” とその否定形が使われていることから、(1) の英語がイギリス英語 (以降 BrE) の系列であることは、学生にも推測しやすい。但し、単なる英米差の段階では留まらず、A, B の対話にさらにどのような違いが現れているか、必要に応じては「文法」の観点から吟味するというヒントを与えてみる。そうすると、B の否定が “Don’t cry any more” であるのに対し、A は “I can’t go on no longer like this,” “I can’t bear no more” と二重否定 (double negation) になっていることに気付く。それでは、A, B それぞれの話者が、同じ地域 (国)、同性 (女性)、同世代であるとする、なぜ全く同条件の二人の言葉に違いがあるのか、学生にはその要因を考えてみるよう促す。

ここでは、二人の社会的身分の差 (B は裕福な家の新妻、A は一杯のお茶代を乞う娘) により、同類の否定構造に標準英語と非標準英語の違いが現れている。日本でも広範囲に存在する地域方言 (regional dialect) については学生にも想像しやすいところであるが、階級の違いによる社会方言 (social dialect) については、日常生活の中で殆ど考慮することがないため、目新しい要素である。高校までの教育では、英語の様々な言語変種 (variety) を意識することのなかった学生が、同じ言語でも国・地域や階級の差によって異なることに目を向ける契機となる。

以下に続くセクションでは、様々なジャンルから精選した引用を挙げ、分析の実践例及び学びの定着を図るための Group Work を提示していく。

## 2. Step II : 情報誌を資料とする分析

### 2.1 実践1 : 「音」のイメージ

英語において「音」は特に重要な要素である。例えば、“friend or foe” の句に見られる /f/ 音、“Care killed the cat.” の諺における /k/ 音、“Pride and Prejudice” の表題に使用されている /pr/ など、語頭の音が重なる現象は英語によく見受けられる。このような音の技法を頭韻 (alliteration) というが、学生には一つの練習として「生きとし生けるもの」を意味する句である“( ) and man” の括弧内に入る語の候補が何かを考えさせてみる。「生きとし

生けるもの→あらゆる生き物」から、「一寸の虫にも五分の魂」という日本語の諺にも少し通じるころではあるが、「人とは対照的に小さく価値のないとされる生き物で、/m/ 音で始まる語」から推測し、“mouse” という小動物を引き出していく。

それでは、この音の反復はどのような場面に応用すると効果的なのか。青木 (2000: 79, 88-89) から抜粋した以下の例から見てみる：

- (2) a. Battles, hands and hanquets. Parades, plays and pageants.  
b. SNOW, SNOW, QUICK, QUICK, SNOW.

(2a) は「戦い（模擬戦）、音楽とご馳走。パレード、劇と仮装行列」という意味で、下線を引いた /b/ 音と /p/ 音がそれぞれ頭韻になっており、また、構造的にも「(複数) 名詞」「(複数) 名詞」and「(複数) 名詞」が並列体 (parallelism) を成している。英語では音や文構造が大切な要素であることが学生にも窺える例である。

日本語にも音から感じるイメージはあるが、音楽性 (musicality) の言語である英語においては特にそれが顕著で、池田 (1992) にも「音象徴」(Sound symbolism) でまとめられているので、学生には、この箇所を参照して英語の音がそれぞれどのような印象を持つのか、調べておくようにする。(2a) で使用されている子音 /b/ と /p/ は有声・無声の別はあれ、共に破裂音 (plosive) であるが、この池田 (1992: 22) によると、前者は「力強さ」、後者は「破裂・軽打」や「はねる動作」を象徴するとのことである。学生には (2a) を音読させ、特に各語の強勢の置かれている音節を強く発声すると、前文三つの語の連なりから、音を遅しく響かせるイメージが浮かび、後半の三語からは弾むような躍動感が伝わる。

さて、(2b) も (2a) と同様、頭韻が使用されているが、接続詞を伴わない連辞省略 (asyndeton) で、一見極めて単純な構造である。しかしながら、この表現には、文化の異なる者には想像のつかない潜在的含みがある。“Slow Slow Quick Quick Slow” というワルツのステップのもじりであるが、学生にはこのような技巧を使用する理由—どのような状況で頭韻やもじり言葉が使用されやすいのか—についても合わせて考えさせてみる。

青木 (2000) によると、(2a) は Wales のお城祭りの宣伝で、(2b) はワルツのステップの “slow” を “snow” に換えて造られた日本車のスバルの広告 (英国用) とのことである。“Snow, snow, quick, quick, snow.” というのは、雪道で左右にスリップする走行のことで、凍りついた道路ではワルツのステップの様には規則正しく走れないが、「こんな危険な走行はやめて、雪道 (snow) でもスバルで安全にワルツを踊りましょう (運転しましょう)。スバルならボタン一つで (quick に) 四輪駆動に切り換えられます。」へと繋がる売り込み文句である。

また、英語では頭韻だけでなく、“here and there,” “rough and tough” のようなイディオムや “A friend in need is a friend indeed.” という諺には脚韻 (rhyme) も見られる。日本語でも、かつて「セブン・イレブン・いい気分」といった CM があった。(2a)(2b) も青木 (2000) の『英語キャッチコピーのおもしろさ』という本から、広告の言葉を取り上げたものである。音遊びで言葉を面白くする理由は、読者や視聴者の目を引き、印象に残るようにすることである。広告・宣伝には、その土地・国の文化、環境や生活様式が現れるという点で、言語と社会の関わりを語るものと言える。

<Group Work> 頭韻・脚韻を用いて、または池田 (1992) の「音象徴」を参照して、英語の宣伝文句を考案しなさい。

## 2.2 実践2 : 「語形成」による造語

読者の目を引くことを狙う点では、新聞・雑誌などにおいても同様に、特に記事のタイトル・見出し文句は重要である。そのためよく見受けられるのが奇抜な表現の挿入である。以下の例を出して、学生には、それぞれの表現が印象に残るか、また何故印象に残るのかを問う：

- (3) a. The Internet Is Head Over Heels for the Yuzuru Hanyu and Javier Fernández  
Figure Skating Bromance
- b. The ‘polifessor’ problem
- c. ‘Megxit’ may seem like a simple portmanteau, but it has far more sinister undertones

(3a) は *Time* (February 16, 2018) から、(3b) は *Korea JoongAng Daily* (December 11, 2008) から、(3c) はオーストラリアの ABC News の記事 (January 14, 2020) からの見出しである。(3a) の “bromance” は “brother + romance” により出来た造語であるが、この記事では、2018 年の冬季オリンピックにおける羽生結弦選手とフェルナンデス選手の兄弟のような篤い友情を表している。(3b) の “polifessor” は、 “politician + professor” の造語で、政界に学者出身の者が多い韓国で、政治に積極的に介入しコネを作る教授を揶揄した言葉である。

(3c) の “Megxit” は、イギリスの EU (欧州連合) 離脱を指す “Brexit” (“British + exit”) をもじって、“Meghan + exit” により出来た造語であるが、ヘンリー王子と英王室を離脱したメーガン妃に対する語である。この (3c) には “portmanteau” (かばん語) と示されているが、上記の例は全て二つの単語の一部を組み合わせて作られた混成語 (blend) である。語形成 (word formation) により作り出される新語は、往々にして斬新なため、人の注目を集めるが、学生にはこのような混成語がどういった状況・意図で作成されるのかを考えさせてみる。従来は存在しなかった事物・概念を表すもの以外では、多くは時代の世相や出来事を映し出す言い回しで、人・物事を茶化したり嘲笑・皮肉や批判を交えたりするものである。

<Group Work> 新聞・雑誌・インターネットの記事から目に留まる内容を参照して、今の社会を反映する混成語・複合語を日本語と英語の両方で作成しなさい。

## 3. Step III : 映画を資料とする分析

### 3.1 実践1 : AmE vs. BrE/AusE<sup>3)</sup>

既述の通り、英語の文学作品を読む機会が減少し (日本語の文学作品についても同様であるが)、読書量が低下している学生にとっては、言葉を分析するのに何から手を付けたらよ

いか戸惑うことが多い。よって、映画など学生にとって身近で扱いやすいものを資料としてみる。

以下の (4a) は、*Crocodile Dundee 1* (1986, 以降 *CD1*), (4b) は *Crocodile Dundee 2* (1988, 以降 *CD2*) の映画から抜き出した対話である：

(4) a. Mick: That's mineral water. Means no crocs. More tucker here than you can poke a stick at.

Sue: Tucker?

Mick: Food. You hungry?

Sue: Starving.

b. Mick: You better take me to the boozer.

Taxi Driver: Boozer? Don't know that one.

Mick: Pub. You know, "somewhere to get a drink." Want to join me?

(4a)(4b) の Mick は *CD* シリーズの主役で、オーストラリア人である。(4a) の Sue はオーストラリアで取材中のアメリカ人記者で、(4b) は Mick がこの Sue に招待され、初めて New York を訪れるシーンである。これらの対話には主語が省かれたり、“crocodile”を“croc”と略すなど口語の特徴が現れているが、学生には、それ以上にここで気になる語は何かと問いかけてみる。そうすると、Sue には“tucker”という語、New York の Taxi Driver には“boozer”という語が、どちらも echo question で聞き返されているように言葉が通じない。(4b) の“boozer”は Mick が“somewhere to get a drink.”と説明しているが、*Oxford English Dictionary CD-ROM* 版 (以降 *OED*<sup>2</sup>) には、2. の項に“A public house” (初例：1895年) で“slang”として記載され、BrE での使用である。(4a) の“tucker”の方も Mick が“food”と言い換えているが、*OED*<sup>2</sup> の 6. の項に“food generally, victuals”とある。“*Austral. and N.Z. slang*”と付記されているように、<sup>4)</sup> 主にオーストラリアやニュージーランドで使用される俗語で、オーストラリアの代表的な俗語辞典である Macquarie の *Book of Slang* にも見出し語として載せられている。<sup>5)</sup>

映画ならではのということで、学生には音声も確認させてみる。そうすると、(4b) の“take”の発音が /teɪk/ ではなく /taɪk/ となっており、標準英語の二重母音とは異なることに気付く。この短い対話の中で、「語彙」と「音声」における AmE と BrE の違い、引いては BrE をベースとする AusE に着目させることができる。

<Group Work> 英語の地域方言 (regional dialect) には、他にどのような方言があると考えられるか、浮かぶものを挙げなさい。

### 3.2 実践2：言葉の性差

続いて取り上げるのは社会方言 (social dialect) である。ここでは性別による言語の違いを扱ってみる。1.1 で調べた階級差の場合とは違い、日本では性差は英語以上に意識される

ため、言葉に性差のあることは、学生にも理解しやすいところである。ちなみに、男女の言語差を研究した Cate Poynton は、評価や概算の形容詞、強意語 (*intensive*)、丁寧表現を含む垣根表現 (*hedge*)、埋め草 (*filler*) と並んで、加重音節 (*reduplication*) を女性が多用する表現の一つと考え、“women are reputed to use more reduplicated adjectival forms” と指摘し、“*itsy-bitsy*,” “*teeny-tiny*” といった音節重複形容詞の例を挙げている (1985: 73)。学生にはあらかじめこの研究のことを紹介しておく。

この Poynton (1985) の指摘を検証する一つの資料としては、男性が女性に扮する *Tootsie* (1982) というアメリカ映画を用いるとよい。以下の (5) はその一例である<sup>6)</sup>：

(5) George: Uh, listen, I talked to Stuart. I, I talked to him yesterday. He'll, he'll be, uh, one, one more week in London . . . and then he, uh, then he definitely, uh, then he . . .

Dorothy Michaels: I missed you.

George: Then he definitely . . .

Dorothy Michaels: You know, you're such a tickly-wickly! You've never been that ticklish before.

女装した Michael (= Dorothy Michaels) に驚き平静を失った George との対話であるが、学生がまず着目するのが、下線で示した“tickly-wickly”と“tisklish”である。本来の性が男性であるためか、映画の中ではしぐさを含め女性性 (*femininity*) が強調されている。*Tootsie* という映画名も、*OED*<sup>2</sup> では異形 (*variant*) の“*tootsy*”の 2. の項に、“A woman, a girl; a sweetheart; occas. applied to a male lover.” また“Freq. as a familiar form of address”と定義され、“(chiefly *U.S.*)”の“*slang*”と付記されているように、主にアメリカの俗語である。

なお、男性としての名前が“Michael Dorsey”で女性に扮した時にはその名前の姓と名を逆にした“Dorothy Michaels”になっていることは、コメディ映画らしい笑いを誘う工夫であるが、学生には、“Michaels”の *-s* は苗字に付くことを伝えておくといよい。ちなみに、父称の命名法では、父親の名に「息子」を意味する接尾辞 (*suffix*) もしくは接頭辞 (*prefix*) を付加して苗字にする。古英語 (Old English / Anglo-Saxon) 起源の *-ing* からは“Browning” (= son of Brown), 古ノルド語 (Old Norse) 起源の *-son* から“Johnson” (= son of John), ケルト語起源の *Mc-* から“McDonald” (= son of Donald) などがあるが、William の場合は接尾辞の *-s* を付け、“Williams” (William and his family) となる。<sup>7)</sup>他にも、“Andrew”や“Jacob”を由来とする“Andrews,” “Jacobs”などを例に挙げ、英語史の学びへと繋げる。

<Group Work>対話 (5) 以外にも、*Tootsie* の中で使用されている言語の性差の例をできる限り多く挙げ、Poynton (1985) の指摘と照合しなさい。<sup>8)</sup>

### 3.3 実践3：意味変化と俗語

続いては、以下の *The Karate Kid* (1984) からの例である：

(6) Daniel: Wow it's beautiful. Hey, Mr. Miyagi, this is great, man! You've got real fish in it. This is outrageous!

(6) は主役のダニエル少年が日系二世のミヤギ氏の家に招かれ、池を泳ぐ魚の群れに感動する場面である。ここでは「わあ」とか「へーッ」といった間投詞的な発声の“man”<sup>9)</sup>といった口語の特徴が窺えるが、学生には全体の意味から違和感を感じる言葉はないかと問いかけてみる。そこで着目するのが“outrageous”で、通常は「無法な」「非道な」などといった強いネガティブな語であるが、この文脈から判断するとその真逆でないという意味が通らないと気付く。そこで、学生に Landy の『アメリカ俗語辞典』(*The Underground Dictionary* の翻訳版)を引くよう指示すると、「みごとな」(great), 「すばらしい」(wonderful), 「すてきな」(fantastic) と定義される俗語で、ティーンエイジャーが発する言葉としては「かっこいい」のような意味であることがわかる。

*OED*<sup>2</sup> では、“outrageous”は、1. “Exceeding proper limits” → 2. “Excessive or unrestrained in action; violent, furious; †excessively bold or fierce (*obs.*)” → 3. “Excessive in injuriousness, cruelty, or offensiveness” の順で意味の推移が示され、肯定的な定義の記載はない。英語史上、語は数々の意味変化 (semantic change) を遂げているが、(6) の俗語用法では意味の拡張 (向上) が見受けられる例である。この現象については、日本語の「やばい」という語を絡めて説明すると学生には理解しやすい。「やばい」は元々「やば」(危険) という否定的な意味で、今でも一般的にはその意味で用いられる一方、特に若い世代の間では、食べ物や音楽・景色などが「すごくいい、かっこいい、とてもすばらしい」という極めて肯定的な意味でも使われ、英語の“outrageous”と共通するところである。

<Group Work> 英語の俗語で思い浮かぶものを挙げなさい (浮かばない場合は日本語で身近に聞く俗語でもよい)。さらに、主にどのような場面で使用されるのか、また、標準語に対して何故俗語を使用するのか、その理由についても考えなさい。

#### 4. Step IV : 文学作品を資料とする分析

##### 4.1 実践1 : 非母語話者の英語

このセクションからは、分析の最終段階である文学作品の考察へと進む。なお、この段階では <Group Work> ではなく、これまでの学びの積み上げから、学生一人一人が作品と対峙するよう促す。社会言語学の視点ということで話し言葉を取り上げるが、中でも学生が言葉の違いが比較的わかりやすい非標準英語を扱う。文学作品から非標準英語の例を挙げれば枚挙にいとまがないが、まずは *Robinson Crusoe* (1719) から抜き出した以下の例から始めてみる :

(7) a. Says he, “If wild mans come, they eat me, you go wey.” “Well, Xury,” said I, “we will both go and if the wild mans come, we will kill them, they shall eat neither of us.” (Chap. II)

- b. “well, Xury,” said I, “then I won’t; but it may be that we may see men by day,  
who will be as bad to us as those lions.” (Chap. II)

古い英語とはいえ、主役の “I” が標準英語を、“Xury” が非標準英語を話しているのは、学生が目にも明らかである。ここで問題となるのが (7a) に見られる “mans” であるが、英語の母語話者ではない Xury は “dog” や “lion” の複数が “dogs,” “lions” であることから推測して、“man” の複数 “mans” としている。このような現象を類推 (analogy)<sup>10)</sup> というが、「類推」は幼少の子供が言葉を覚える知的発達上重要であると共に、この「類推」のために、英語史上多くの語が変容していったことを説明しておく。特に “will,” “shall” の過去形 “would,” “should” に黙字の *l* があることから、“can” の過去形が、“(15-16c) coud → (often 17-18c) cou’d → could”<sup>11)</sup> となったことなど身近な例を出しておくといよい。なお、(7a) の 2 行目の “mans” は、野蛮人の襲来を恐れる Xury をなだめるのに主役が Xury の気持ちに同化して言っているのであって、通常は (7b) に挙げているように標準の “men” である。

#### 4.2 実践2：非標準英語：AmE を中心として

次の例は Mark Twain の *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884, 以降 *AHF*) から抜き出した対話である：

- (8) A: “Have you got hairy arms and a hairy breast, Jim?”  
B: “What’s de use to ax dat question? Don’t you see I has?”  
A: “Well, are you rich?”  
B: “No, but I ben rich wunst, and gwyne to be rich agin. Wunst I had foteen dollars, but I tuck to speculat’n, en got busted out.”  
A: “What did you speculate in, Jim?”  
B: “Well, fust I tackled stock.” (Chap. VIII)

(7) の場合と同じく、(8) においても標準英語の話者 A と非標準英語の話者 B の対話であることは、“I has” のような主語と動詞の不一致 (disagreement / false concord) で、学生にも一目瞭然である。音の面から見ても、発音との連動が推測される綴り字として、“take” の過去形 “took” (/tʊk/) の変形 “tuck” (/tʌk/) や、*OED*<sup>2</sup> に “Dial. var. of *Again adv.* (= once more)” と記される “agin” がある。また、“once” の異形で “(*dial.* and *U.S.*)” の “wunst” や “Dial. and U.S. dial. var. of *FIRST*” の “fust” には “U.S.” が付記されており、主に AmE で使用される語である。2行目の “de” は *OED*<sup>2</sup> に “a *dialectal* (Kentish), foreign, or infantile representation of *THE*” と英国の地方方言でもあるが、『アメリカの文学方言辞典』には「[ð] が [d] となる発音は、アメリカ南部黒人の発音として一般的である」<sup>12)</sup> と示され、同じく 2行目の “dat” は *OED*<sup>2</sup> に “Repr. dial. (esp. Ir.), W.I., and U.S. Black pronunc. of *that*” とされており、これらにより、B の英語は AmE、特にアフリカ系アメリカ人の非標準英語であることが窺える。



なお、(8)において別途学生に着目させたい語は2行目の“ax”である。この語は *OED*<sup>2</sup> に“obs. or dial. form of ASK v.”と記載されているように、標準英語では“ask”という動詞で、“(axien >) ax (aks) → ask”のように、隣接する子音の入れ替わった音韻転換 (metathesis)<sup>13)</sup> の例である。*OED*<sup>2</sup> によると、“ax”の形は14世紀から16世紀までは単なる異形であったが、16世紀からは“dial.”となっており、*AHF*の発行された19世紀下旬から考えると非標準の方言である。かつて、18世紀の文学作品を資料に階級差を研究した McIntosh (1986: 12) は、下層階級の言語は“colloquialism,” “incorrectness (solecism)”と“old-fashionedness (archaism)”に集約されると指摘している。(8)においては、例えば、“specalat’n”における音の脱落 (elision) や /ŋ/ が /n/ になる口語の特徴 (⇒ colloquialism), 既述の“I has”といった文法違反 (⇒ solecism) と並んで、この“ax”の古語用法 (⇒ archaism) に、McIntoshの指摘である三つの特性が現れていると言える。

### 4.3 実践3：非標準英語：BrE vs. AmE

続いて、以下の(9a)には Goldsmithの喜劇 *She Stoops to Conquer* (1773, 以降 *SSC*) から、(9b)には(8)と同じ *AHF* からの引用を挙げておく<sup>14)</sup>：

(9) a. “My pleace is to be nowhere at all; so Ize (< Ise) go about my business.”

(Act II Scene i)

b. “Say, who is you? Whar is you? Dog my cats ef I didn’ hear sumfn. Well, I know what I’s (< Ise) gwyne to do: I’s (< Ise) gwyne to set down here and listen tell I hears it ag’in.”

(Chap. II)

(9a)はBrEで(9b)はAmEであるが、“Ize,” “I’s”は共に“Ise”の異形で、“I is”の縮約形である。*OED*<sup>2</sup>によると、“Ise”のa.の項には“Dial. or archaic abbreviation of *I shall*; also = *I’s*, *I is*, dial. for *I am*.”(初例: 1796)とあり、b.の項では“*spec. in the United States*. Also *I’s*.”(初例: 1852)となっている。学生には(9a)(9b)それぞれの例を文法的に正しく言い換えるとどうなるか考えさせると、(9a)の“Ize”は標準英語では“I shall”であり、(9b)の“I’s”は“I am”であると判断できる。特に“United States”に多く見られるというb.の項には“Freq. in Black English writings.”と付記されているが、*AHF*においてもアフリカ系アメリカ人のJimの語る言葉に出てくる。

ちなみに、(9b)の“Dog my cats”という特異な言い回しは学生には奇異に感じられるが、まず“dog”の品詞は何かと問うてみる。この“dog”は動詞で、*OED*<sup>2</sup>のv.の8.の項に“Used in imprecations.”と示される「誓言・ののしり」のスウェアリング (swearing) で“*U.S. slang*”と記載されているように、AmEの俗語である。

地方方言 (regional dialect) は国や地方を問わず、共通するところが多い。1.1の(1)で扱った二重否定や4.2の(8)の“I has”のような主語と動詞の不一致は、英米にも共通する非標準英語で、例えば、Charles Dickensの言語の研究書であるBrook (1970)では、二重否定については83.の項に“Double negatives are very common, as they are in early English and in many regional dialects.”(Brook, 1970: 243)と指摘され、主語と動詞の不一

致も、82. の項に “There are many examples of lack of concord between the subject of a sentence and its verb.” (Brook, 1970: 242-43) と指摘されている。それ故、学生がある国・地方ならではの方言を分析する際は、何が他の地方の方言と共通し、何が独特のものであるか吟味する必要があることを伝えておく。

#### 4.4 実践4：俗語と隠語

次に Dickens の *Oliver Twist* (1839) から抜き出した例を挙げておく：

- (10) A: ‘A young fogle-hunter,’ replied the man who had Oliver in charge.  
B: ‘Are you the party that’s been robbed, sir?’ inquired the man with the keys.  
C: ‘Yes, I am,’ replied the old gentleman; ‘but I am not sure that this boy actually took the handkerchief. I—I would rather not press the case.’ (Chap. XI)

学生にはまず下線部の “fogle-hunter” の意味を辞書を引かずに推測するよう促す。推測が難しい場合は、点線部の “robbed” と “took the handkerchief” からどのような状況にあるのか想像させてみる。そうすると “rob” という動詞から「窃盗」「泥棒」が浮かび、具体的に取られたものが “handkerchief” であることへと繋がる。そこで *OED*<sup>2</sup> で “fogle” を調べると、“slang” と記され、“A handkerchief or neckerchief, usually of silk” と定義される語であることがわかる。さらに、“fogle-hunter” という複合語になると “a pick-pocket” という意味で、この複合語としての *OED*<sup>2</sup> の初出は1823年のGroseの *A Dictionary of the Vulgar Tongue* からで、“Cant” と記されているように「隠語」である。

(7) (8) (9) の場合とは異なり非標準英語の特徴が出ていないため、A, B, C 三者の身分差は一見定かではないが、隠語の “fogle-hunter” という表現や俗語の “fogle” を使う A の話者に対し、C の話者には “handkerchief” と置き換えられ、この二人の言葉の違いに社会階級の差が現れている。ちなみに、Dickens はこのように俗語や隠語を使用する際には、別の人物を通じて標準語に置き換え、一般読者にわかりやすい工夫をしていることが多いので、他にも一例挙げておく：

- (11) Oliver: “What’s the matter?” demanded Oliver.  
Dodger: “Hush!” replied the Dodger. “Do you see that old cove at the bookstall?”  
Oliver: “The old gentleman over the way?” said Oliver. “Yes, I see him.”  
(Chap. X)

スリの少年 Dodger が “cove” という語を用いているが、この語は “A fellow, ‘chap’, ‘customer’” という意味で、<sup>15)</sup> *OED*<sup>2</sup> に “slang (orig. *Thieves’ cant*)” と記載されるように、泥棒の隠語である。Dodger が “that old cove” と言ったのに対し、Oliver が “the old gentleman” と標準英語に言い換えており、ここでも一般読者への配慮が示されている。

さて、以上のように文学作品に見られる口語表現の諸相を提示していった後に、ゼミのような少人数単位や大学院の演習では、学生一人一人に任意のテキストを自ら捜して、その一

節に見られる英語の特徴を「音声・綴り字」「語彙」「文法」の観点から分析するよう指示してみる。ハンドアウトを作成したり、パワーポイントのスライドにまとめて 10 分程度の「ミニプレゼンテーション」をすることで、学生の実践力を培っていく。

### おわりに

本稿では、主に話し言葉の考察の手順について、学生の習熟度に合わせステップアップしていき、最終段階では文学作品の吟味へと繋げていく方法を模索した。2.1 から 3.3 に挙げた <Group Work> については、いくつか実際に授業で試してみたが、一人では思いつかないことでも、複数で対応することで互いに刺激し合い意見が出やすくなる。オンラインの環境では、授業中あるいは授業後のアクティビティで、Zoom のブレイクアウトルームなどを利用し意見交換をするとよい。発展的には、口頭発表やその後の質疑・応答により互いに学びを深め合ったり、教員提出用の課題として、パワーポイントのスライドに「音声ナレーション」を用いて学生自らが分析した説明を入れたりすることで、既習事項の確認を図ることである。

英語専門の学科の授業で一昔前普通に扱われていた長編小説も、今では本を開くまでもなく敬遠されがちである。そのような現状において、本稿の狙いとしては、まず比較的取り組みやすい短文の口語表現を起点に、段階的にレベルを上げ、引いては文学作品の分析にも挑戦したいと思う学生を育成することであった。文学作品の口語表現が必ずしも実際の言葉を正確に反映しているとは限らないが、あるいは作家によっては書き方に一貫性がない場合もあるが、地方方言・社会方言を含め非標準英語は、難解な長文読解に比べ、学生が興味・関心を示しやすいものである。また、方言を調べることは、「音声」「文法」だけでなく「英語史」の知識も必要という点で、英語の総合的な力を働かすことになる。これまでに、様々な角度から文学教材の英語教育への応用が考察されるようになってきたが、「英語史」や「社会言語学」のアプローチからの教材開発が体系的にまとめられた研究については、まだ考察の余地を十分残している。今回は社会言語学の視点を踏まえ、「言葉の多様性」をテーマに学生の文体分析の実践力を養うことを目指したが、これからも引き続き、英語学の知見を英語教育に活かす方法を検討していきたい。

### 注

- 1) 本稿の下線（点線を含む）は、全て筆者による強調。
- 2) 本稿で使用するテキストは、引用文献の<テキスト>の項を参照されたし。
- 3) AmE, BrE に合わせて、オーストラリア英語を AusE と略す。
- 4) 本稿で使用した品詞、世紀以外の略記は、以下の通りである：  
Austral.: Australia(n), *colloq.*: colloquial, *dial.*: dialect(al), *esp.*: especially, *Freq.*: frequently, *Ir.*: Irish, *occas.*: occasionally; *orig.*: originally, *pronunc.*: pronunciation, *Repr.*: representative, representing, *spec.*: specifically, †; *obs.*: obsolete, *var.*: variation, *W.I.*: West Indies.
- 5) “boozier” については、“booze” で 1. の項に “alcoholic drink” として記載されており、“boozier” としては、1. “one who drinks immoderately,” 2. “a hotel” となっている。

- 6) 『トッツィー』 CINEX (英語字幕入り学習洋画ビデオ) 参考。
- 7) 中尾・寺尾 (1988: 75) の「父称 (patronymic), 命名法 (naming)」のコラム, 橋本 (2005: 78), 荒木・宇賀治 (1984: 288) を参照。
- 8) 他にもこの場面だけでも, “I’m awfully lonely” に見られる強意語 (intensive) や “I wonder if you could help me,” “I wonder if you wouldn’t mind buying me lunch.” などといった丁寧表現などが畳み掛けるように使用され, Poynton (1985) の指摘に符号するところが多いことが学生にも確認できる。
- 9) *OED*<sup>2</sup> では, II. 4. e に “a meaningless expletive, or as an interjection expressing surprise, delight, deep emotion, etc.” と示されている。
- 10) David Crystal の *A Dictionary of Linguistics and Phonetics* (以下 *DLP*) によると, “analogy” は “A term used in historical and comparative linguistics, and in language acquisition, referring to a process of regularization which affects the exceptional forms in the grammar of a language.” と定義されており, 言語習得の途上にある子供の「類推」による言い間違いの例としては “mens, mans, mouses” が挙げられ, 方言としては, 不規則動詞の過去形が規則動詞と同じ “goed/seed/knowed” → “went/saw/knew” となる例が挙げられている。
- 11) 時代表記は *OED*<sup>2</sup> による。
- 12) この説明については, “den” の項参照。
- 13) *DLP*によると, “metathesis” は “A term used in linguistics to refer to an alteration in the normal sequence of elements in a sentence—usually of sounds, but sometimes of syllables, words, or other units.” と定義され, “aks → ask” の他にも “brid → bird” の例が示されている。
- 14) (9a) の “Ize (< Ise),” (9b) の “Ts (< Ise)” の不等式を含む括弧内は筆者による追加。
- 15) *OED*<sup>2</sup> の “cove” の *n*<sup>2</sup> より。

## 引用文献

### <テキスト>

- Defoe, Daniel. (1719) *Robinson Crusoe* (The World’s Classics) (1983), Oxford University Press, Oxford.
- Dickens, Charles. (1839) *Oliver Twist* (The World’s Classics) (1982), Oxford University Press, Oxford.
- Goldsmith, Oliver. (1773) “She Stoops to Conquer” in *Collected Works of Oliver Goldsmith*, Vol. V. (1966), edited by Arthur Friedman, Clarendon Press, Oxford.
- Mansfield, Katherine. “A Cup of Tea” (1922) in *Katherine Mansfield Selected Stories* (Oxford World’s Classics) (2002), Oxford University Press, Oxford & New York.
- Twain, Mark. (1884) *Adventures of Huckleberry Finn* 『ハックルベリー・フィンの冒険』 (那須 頼雅・注) (1986), 開文社, 東京.

- 青木 茂芳 (2000) 『英語キャッチコピーのおもしろさ』, 大修館書店, 東京.
- 荒木 一雄・宇賀治 正朋 (1984) 『英語学大系 第10巻 英語史 IIIA』, 大修館書店, 東京.
- Brook, G. L. (1970) *The Language of Dickens* (Language Library), André Deutsch, Budapest.
- Crystal, David (1997) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, 4th edition, Wiley-Blackwell, Hoboken.
- 橋本 功 (2005) 『英語史入門』, 慶応義塾大学出版会, 東京.
- 堀内 克明 訳編 (1975) ユージン・E・ランディ 『アメリカ俗語辞典』 (*The Underground Dictionary* by Eugene E. Landy, 1971), 研究社, 東京.
- 池田 拓朗 (1992) 『英語文体論』, 研究社, 東京.
- Lambert, James (2000) *Macquarie Book of Slang: Australian Slang in the Noughties*, Macquarie Library, Sydney.
- McIntosh, C. (1986) *Common and Courtly Language: The Stylistics of Social Class in 18th-Century British Literature*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- 中尾 俊夫・寺尾 廸子 (1988) 『図説 英語史入門』, 大修館書店, 東京.
- Poynton, Cate (1985) *Language and gender: making the difference*, Deakin University Press, Victoria.
- 沢田 敬也 (1984) 『アメリカの文学方言辞典』, オセアニア出版社, 横浜.
- Simpson, John A. & Edmund S. C. Weiner, prepared (1989) *The Oxford English Dictionary*, Second Edition on CD-ROM Version 3.0 (2002), Clarendon Press, Oxford.

<オンライン・ソース>

- <https://time.com/5162460/olympics-2018-yuzuru-hanyu-javier-fernandez-bromance/>
- <https://koreajoongangdaily.joins.com/news/article/article.aspx?aid=2898467>
- <https://www.abc.net.au/news/2020-01-15/megxit-when-portmanteau-goes-too-far/11866920>
- <https://transcripts.thedealr.net/script.php/crocodile-dundee-1986-NYZ>
- [http://www.script-o-rama.com/movie\\_scripts/t/tootsie-script-transcript-dustin-hoffman.html](http://www.script-o-rama.com/movie_scripts/t/tootsie-script-transcript-dustin-hoffman.html)
- [http://www.script-o-rama.com/movie\\_scripts/k/karate-kid-script-transcript-miyagi.html](http://www.script-o-rama.com/movie_scripts/k/karate-kid-script-transcript-miyagi.html)

<その他>

- Crocodile Dundee* (1986), Screenplay by Paul Hogan, A Paramount Picture, Rimfire Films Limited.
- Crocodile Dundee II* (1988), Screenplay by Paul Hogan, Paramount Pictures Corporation.
- 『トッツィー』 (1982, 1993) CINEX (英語字幕入り学習洋画ビデオ) : Cinema English Exercise, 株式会社 ソニー・ピクチャーズエンタテインメント.